そこらに転がっとる石ころと一緒になるわ」と思うて考え直して生きることにしたがよ。

年取って50歳に近うなってきたら、「実家に帰っても大したことは出来ん」思うて、防波堤で独りでいろいろなこと考えて、諦めた。

特に良いことも無かったけんど、これと言うて悪いこともなかった。今日まで生きておって、こんなことがわしの最後のちっぽけな喜びであるかもしれんな。若かったら（故郷に）帰りたいわ。まだ30歳ぐらいだったら帰りたい。

「大島青松園で生きたハンセン病回復者の人生の語り（2015年12月15日発行）より、一部抜粋して掲載

Kさんの語り（大島青松園）

10歳頃までは何不自由なく暮らしていたことは覚えているね。どうも小さい頃は可愛かったみたいで「ちょっとこの子貸してくれ」言うて奪い合うようにして子守りしてもらいよったげな。自分の一番良い思い出は11歳までやと思う。子どもの時が一番、幸せだった。発病当初は「何が何でも治さんと駄目」と思ったんよ。で、大風子（=大風子油）を自分で買うてね、打ちよったんよ。素人が注射するんじゃけん、化膿してばっかり。2、3回してやめた。今も痕が残っとる。ほんでね、この病気やったら○○教がいいとか、四国遍路がいいとか石鎚さん（=日本七霊山の一つ霊峰石鎚山）に参ったらいいとか、お猿の頭を煎じて飲んだら治るとか、いろんなこと言うてくれる人が居るわ、親切か何かしらんけど。○○教は家から一里もない所にあるけん、だいぶ続けて行ったで。「このノートに書いとることを暗記したら良い」って言われて、行き帰りに暗記した。治ると信じてね。半年くらい通ったら、「近畿の本部へ行ってくれ」って言い出したんよ。それで、おかんが「もう此処では駄目、行っても無理や」って言い出したんよ。ほんでもう、「それなら療養所に行くわ」言うたんよ。ここに居っても金ばっかりいるんで。裕福な家でもないしね、うちは。それで大島に来たんやけど、一番最初は「高松は綺麗な街やなあ」と思った。ほんで「大島もきれいな島やろうなあ」って思って入ってきたら中はひどいもんやったなあ。当時は部屋に入ったら畳は真っ黒で、じと～っと湿っけた感じ。畳の縁のない柔道の畳みたいなやつなんよ。ほいで汚かったで。朝、布団あげたら、みんなで「1、2の3」で箒で掃くんよ。箒で掃いたら真っ白い埃で敵わんかった（=耐えがたかった）。「こんな所に居れん、帰る。」言うたぜよ、母に。けど、帰るいうても、そういうわけにも駄目し。それは辛かったけどね。

ここへ来たときは茫然自失っていうのかなあ、何も考えられんかった。とにかく帰りたいんよ。「こんなとこで死んでたまるか」いう気持ちやったけんどよ。気持ちはあっても病気が騒いでいくきにね（=病勢がひどくなる）。諦めるしかなかった。最初は3ヶ月は無理でも、3年したら帰れるやろって思うとったんよ。だけど、子どもなりに辺りを見よったら、全然帰る人が居らんのよ、帰れる人がね。みんな自然と体が悪くなっていくんよね。「みんなこんな悪い状態になって何時まで命があるのかな」って思いよったよ、子ども心にな。ほんで、納骨堂があるやろ、火葬場もあるしな。療養所っていいながら納骨堂もちゃんと備えてる。あれ見た時、「もう灰になるまで帰れんのかな」と思ったね。少年舎に来た時ね、男女あわせて14～15人おったと思うよ。みんな勉強するんよ。偉いなあと思った。今さら勉強したって、何になるかと思ったけど、やる人は勉強しとった、一生懸命ね。

中学校を卒業したら一般寮に下がらな駄目くなるんよ（=一般寮に移動することを「下がる」という）。下がった部屋がまた汚いんよ。24畳で15～16人居ったかね。若い時は腹立ったでよ。「これが療養所か、これは収容所じゃないか」と思って。子どもの時はそんなんは思わんよ。20歳過ぎると仕事ばっかりやろ。それも強制的やろ。治療するところや思って来とるのに、これじゃ療養じゃない、収容所やと思った。傷があるのに仕事せんと駄目から、傷が悪化して切断せんと手に負えんようになって、指がどんどん短くなるしよ。昔はね、1～6病棟まであったんよ。6病棟が一番重症で、ひどくなるとそこに送られるんよ。6病棟にはみんな（患者作業に）行きたがらんのやけど、順番に行かなきゃならんのよ。病棟看護に行っとったら食事どころじゃないけん。15日間、ぶっ通しで行くんよね。15日で1ヶ月分の賃金くれるけど、元気な者には強制的にまわってくるんよね。（患者作業のうちで）一番きついのは病棟看護やなあ。昔の看護婦さんは冷たかったで。平均的に冷たかったね。ものが言いにくかった。医者も患者区域には入って来んもん。入ってきても、帽子にマスクして、目だけ出して、予防着を着て、長靴まで履いて。家の中に土足で上がってきた時代やもんね。土足か、土足じゃない時はつま先歩き。汚い所を歩かんでもすむように。こっちは新聞敷いて待っちょる。

僕らが入ってきた昭和23、24、25年頃は棺桶が1日に2つも3つも並んどった、厳しい時やけん、食事も悪いしね。弔って悲しいとか、そんなんは全然なかった。中には悲しんでいる人もおったと思うけど。「こうやって死んで火葬して納骨堂に入る、それも有りかな」と思いよった、深く考えんと。ほんで僕らも若かったしね、湯灌もした。部屋に順番にまわって来るのよ。「今日は何寮の○○さんが亡くなったき、同じ寮の者が行ってくれ」って。僕らも相当、湯灌したでよ。30体以上したかな。今はきれいに化粧までしてくれるけどね。もう、石ころみないなもんよ。あっちこっち棒擦り（=デッキブラシ）で擦るんよ。洗う言うても手で洗うんやない、棒擦りよ。物よ、死体いうたら。ホースかバケツで水をジャンジャンぶっかけて、擦るんよ。「もし自分が亡くなったら同じことされる」とか、それは全然思わん。あの頃の自分はバチが当たるようなことはせんけどよ、まあいい

加減やったなあ。「ああ、またかー」って言いよった。700人もおったら亡くなる人も多いで、1日に3つも棺桶が並ぶ時あったしよ。座り棺に入れて、それを運んでいって、夜伽（＝お通夜）して火葬して葬式するのよ。患者が全部するんよ。

自殺者も多かったね、首つり。毎回、探しに行ったでよ。放送がかかるじゃろ「○○さんが居らんけん探してくれ」って。探しに行くやろ。なんぼ見つけたことか。ドキッとするで、見つけた時は。そうやって命を絶った人も居る、悩みに悩んでね。自分が崩れていくんを見よったら、将来を悲観するんよね。俺も終いには「考えたってしょうがない」と思うたけど、それまではやけくそになって、酒もかなり飲んだでよ。もう、帰れんのやけん。所帯持ちの方が多かったね、死ぬんは。やっぱり子どものこととか、いろんなことを心配するんじゃろね。こっちも病気やき可哀想なんやけど。小さい子を置いてきたりしたらつらいわな。男の親にしても女の親にしても、やっぱり家のことが心配やんね。

中学校の時に発病したけんねえ。「もう家に帰れんし、家もだんだん遠のいていくなあ。妙な病気にひっかかったもんやなあ」と子ども心に思うて、しばらく自分なりに考えた。一番考えたのは家のこと。「俺がこんな病気になってしもうて、どんなになるんやろ」って思った。当時よく言いよったやん、「村八分」とか。あんなんにならへんかなとか思いよった。心配事は家のことばっかりやね。こんな兄貴がいるからいうて弟や妹がグレたらどうしようかなと思って。20歳で自分が結婚したんやけど、そしたら妹と弟がもう年頃やけん「結婚できるかな」とそればっかり思うてね。「こんな病気になった兄がおって、嫁に来てくれる人が居るんやろか。妹をもらってくれる人が居るんやろか」、それがずっと頭にあったね。何年かして「弟も妹も片付いたけん」って電話があってね。安心はした。ほれで（＝それで）帰るのも止めたんよ。結婚して他人も家に入ってきたことだしね。「もう一切電話すんなよ、こっちもかけんけえ。こっちのことは心配せんで良いけえ。もしものことがあったら連絡するけん。『電話がないんは元気で居ることや』と覚えとってくれ」って言うた。弟も嫁にはよう言うてないと思うわ。「わしが女房を取る時は、ちゃんと了解をとって一緒になるけん」って言いよったけど、結婚したら「兄貴。俺、まだ女房にあのことを言うてないんよ」って言いよった。「人の噂で耳に入っとるかもしれんけど、自分から名乗らんでも良え。そんなに無理して言わんで良え。隠すもん隠していけ」って言うたんよ。だけん、今だによう言わんのやろう。それだけ重うに受け止めるんよ。ハンセン（病）のことを。それ聞いた時ね、「ほんまに申し訳ない」と思った。ほんで「自分はいつまで生きとったら良いんかな」ってつくづく思ったよ。生きてるだけで負担かかるやろ、身内にね。「自分が生きとるが為に迷惑をかけとる」というのが今でも消えん。元々、実家に帰る気もなかったし、外に出て行く気もなかった。外に出ていくんが怖かったもん。怖い。人の目がいよいよ怖かったけん。今でこそそんなにじろじろ見ることもなくなったけど、前やったら姿がなくなるまでじっと見られとった。高松の街でもね、「そこにお金置いとって」言うて受け取りに来んのよ。品物だけ出して奥に入ってね。

ほんで、うどん屋に行ったらね、「うどん持ってきてくれ」ってなんぼ言うても持ってきてくれん。そんな時代やったよね。みんな買い物行ったり、

栗林公園に行きよったけど、外に出るのが怖くてしばらく出なかったね。こうやって大島の看護婦さんと話すことも嫌やった。健常者の目を見るんが怖かった。もう、体の中に染み込んどる。根付いてしもうとるんやろね、恐怖心がね。周りの人は「そんなに見られとれへん」って言うけど、見られてるように感じるんよ。いつの間にか、らい（＝ハンセン病）があっても外へ出かけられるようになったのは看護師さんや職員のおかげやね。

昔は国全体が貧しかったけん仕方ない部分もあるけど、軍国主義やけん、「神国日本に崩れ者はいらん、街の中をうろうろされたら困る」いうて強制収容して、公共の福祉やいうて醜い者を一か所に集めたやろ。あれはひどかったね。国策やったけんね。強制収容はある程度は必要やと思うんよ。だけど、らいの原因が分かり、治療法ができた時点でらい予防法を止めて欲しかった。国賠訴訟より平成8年のらい予防法の廃止が一番嬉しかったね。身内の者はそれまで世間に対して立場がなかったけど、らい予防法が廃止されて家族も解放されたと思うんよね。らい予防法が廃止された時はほっとした。重荷がとれた。

入所者もだいぶ少のうなった。寂しいなるね。もう50年以上の付き合いだしよ、普通の付き合いと違うけん、なお寂しいよな。もう何処っちゃ行きたくない。今思うのは、この島で最期を迎えたい。ここが僕のふるさと。ほんで、人によっては「分骨を」と言うけども分骨は嫌やね。土佐の国に帰りたいとは思わん。ここが終の棲家。大島が終の棲家。ここに骨を埋めたい。

俺ね、大島に来た子どもたちに話すことがあるんやけど、「僕ら（＝君たち）、希望もいっぱいあるやろうけど、人の痛みが分かる人になってよ」と言うちょる。

それと、「ここ（＝大島青松園）は無うなる。もし何十年後かに、「僕たち、あの小さい島に行ったけど、今はどんなになってるのかな」ってふと思い出したら、四国に足を向けることがあったら、大島にも足を向けてもろうたらありがたいなあ」ちゅうて、子どもらと話してお別れする。

「お父さんが若いときに大島に行ったことがある。こんな病気の人がおったんよ」って話したときに、子どもが「自分も行ってみたい」って言うたら、ぜひ、この島を案内してほしいと思って。その頃には、この島がどうなってるか分からんし、もう僕らも居らんけどね。

「大島青松園で生きたハンセン病回復者の人生の語り（2015年12月15日発行）より、一部抜粋して掲載

山本洋先生とハンセン病～史料からハンセン病患者を想う～

元四万十町大正診療所長の山本洋医師（故人）は診療所を退いた後、小川正子の「小島の春」を読んだことをきっかけに、ハンセン病にまつわる四万十川流域の調査をされていました。

その後、国立療養所長島愛生園に内科医長として勤務しながら、空き時間で調査を続けられ、その記録として2作品が、国立療養所長島愛生園の季刊誌「愛生」と国立療養所邑久光明園の季刊誌「楓」に残されています。

- 「愛生」令和3年9・10月号（第75巻・第5号通巻833号）に前編、同年11・12月号（第75巻・第6号通巻834号）に後編を掲載
- 「楓」令和5年11・12月号（通巻第614号）